

研修医のコーナー

登別の研修で貴重な経験

この度はこのような機会をいただき、ありがとうございます。JCHO九州病院初期臨床研修医2年目の坂口嘉彬と申します。福岡市で生まれ育ち、大学卒業まで一度も外に出ることなく北九州に就職致しました。福岡市とは一味違う魅力に満ちているこの地で、仕事に、飲みに、充実した毎日を過ごしております。

九州病院での研修については、恐らく同期の誰かが述べることと思いますので、この場では割愛させていただこうと思います。当院での研修プログラムの一環として、1カ月間の地域医療研修がありますが、6月に北海道のJCHO登別病院で研修して参りましたので、自分なりに感じたことを述べたいと思います。

普段は急性期医療に携わってきた私にとって、登別での経験はとても新鮮でした。慢性期リハビリ病棟での勤務でしたので、これまでのようなりハビリ加療を依頼する診療情報提供書を送る側から、受け取る側の世界に足を踏み入れた訳です。活気あるリハビリ現場を目の当たり

JCHO九州病院 坂口 嘉彬

にし、退院に向けた地域連携の現状を知り、“チーム医療”について九州病院での研修以上に学ぶことができました。また、自分自身と向き合う非常にいい機会となりました。日々の激務を、ともに励まし合い乗り越えてきた同期と離れ離れになった寂しさはもちろんありましたが、この時期に一呼吸置いて、今後についてなど考えられたことは良かったです。余談ではありますが、週末は休みをいただけたので道内旅行も満喫できました。初めての一人旅で不安だらけでしたが、各地を巡る過程で一皮むけた気がします。メンタル面も含めてですが…笑。

今後の進路に関しては、学生時代から思い描いていた通り、小児医療の現場に携わっていければと考えております。新生児医療や小児循環器分野にも力を入れている九州病院で研修できるという恵まれた環境に感謝し、残された研修期間を全力で邁進^{まいしん}していく所存です。微力ながら北九州の医療に貢献できるよう努めて参りますので、今後ともよろしくお願いいたします。

日々準備の積み重ね

黒崎の土地で研修医として働き始めて、早いもので1年半が経とうとしています。後輩研修医も入り、フレッシュかつアグレッシブな姿勢に刺激を受けながらも彼らにたいした指導もできていない自分に反省する毎日です。時には仕事が終わらずに日付が変わるまで病院に残っていることもあります。担当した患者が元気になって退院していく姿を見るのはやはりうれしいもので、やりがいを感じながら働くことができています。

この原稿を書いている今現在は8月の夏真っ盛りで、ナースステーションで仕事をしているとデイルームのテレビからは硬式球を打つ金属音と歓声がひっきりなしに聞こえてきます。勝利を目指して戦う高校球児の一生懸命な姿には、いつになっても感動するものです。私も大学時代はバレーボール部に所属し、優勝を目指して日々練習に励んでいました。スポーツに限らず団体で一つのことを目指して一生懸命になった経験は必ず何らかの財産となるものです。最後の西医体を終えて私が強く感じたことがあります。それは“Chance visits the prepared mind”というパスツールが残した言葉に表されていま

JCHO九州病院 田中 惇史

す。チャンスや機会に巡り合うことができるように、そしてそれをものにできるように日々準備を怠らない。このことを胸に毎日を過ごすことを心掛けるようにしています。実際の医療現場では、やはりうまくいかないことの方が多く、自分なりに勉強していてもそれが実際に結果に結びつくことはそう多くはありません。それでも反省を重ね、病める患者の力になれるように一歩ずつ前に進んでいきたいと思っています。

北九州市は年々高齢化が進んでおり、救急搬送される患者も高齢者が圧倒的に多いように感じます。小倉のコレットや黒崎の井筒屋も2019年の閉店が決まっており、ますます活気がなくなっていくようにも感じますが、一方で北九州市はその医療や介護が評価され、50歳から住みやすい地方ランキングで1位にも選ばれています。高校時代までを長崎で過ごした私には、北九州は長崎街道という道で江戸時代の頃から通じていたようです。黒崎で働くことになったのも何かの縁だと思い、全国で高い評価を受けている北九州の医療に貢献できるように日々準備をしていきたいと思っています。